

---

# 星

バーボン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星

### 【Zコード】

N3130E

### 【作者名】

バーボン

### 【あらすじ】

心の中で何かが止まった。半年前に俺はここに落ちてきた。心の空白と過去の自分と今の自分。半年振りに再開した仲間。その時何かが動き始めた。渴ききつた心に血が流れ始める、男として、自分として生きようとした主人公が乾いたエグゾーストの黒いポルシェで街を疾走する。自分を取り戻すために。

## 渴きの心

### プロローグ

ピンと張りつめている。体におそいかかる寒さを少しでもしのごうと新聞紙を頭からかぶった。12月、もうそろそろ年の瀬を迎えるころだ、都會の喧騒が聞こえてくる。無数の車のヘッドライトとテールランプがきれいにつながつて帯をなしている。自分の前を通りすぎる人波はこちらを気にも留めていない。空を見上げた、星がまたたいている、明日は晴れるのだろう放射冷却のせいで朝は冷え込むはずだ。寒い朝になりそつだ、俺はさらに新聞紙を重ね目を閉じた。

ホームレスになつて半年ほどがすぎた、全てが崩れた。運び屋の仕事を請け負つていた、何を運んでいたかは知らない、それが俺のルールでもあつたからだ、届けてほしい物を相手先へ届けていた、かなりの収入になつた、信用していた仲介屋から仕事を請け負いこなしていたが全てが崩れた、自分の周りにいた奴らは手の平を返したようにいなくなつた、誰に嵌められたのかどうかもわからないままここに落ちてきた、誰も信じないと心に誓つた、ただ、今思い返せば腐つた自分の周りにいた奴らは腐つた自分と同類だつたということがはつきりと分かつてゐる、それが分かつことがせめてもの救いだといえるだろう、ただあいつらだけは違つた、「恭一」、「直樹」、途中まで一緒だったがそれぞれが違う方向へ逃げた、どうしているかも分からぬ、ただ、生きていればこの同じ空の下にいるのだろうと思つてゐる。

年が明けた、どうということのないいつも暗く寒い朝だ、俺は体を起こし目の前にあるまだほとんど吸われることなく捨てられた煙草を拾いライターで火を点けた、白い吐く息と煙が混じり合いな

がら空へと昇つていいく、ぼんやりとそれを眺めやがて火を消した。

毎朝くる小高い丘の上の墓地に来た、まだ暗い朝だ、人影など見えない。まずは体をほぐすためにかるく柔軟をした、走り出す、丘の端から端までは500Mといったところだろうか、250M程走つたところでステップを踏む、シャドーボクシング、昔ジムに通いそれなりにやつてきた、身体はそれなりに覚えていてこの半年程で体力も持久力もそれなりに戻つてきている、ジャブとストレートのコンビネーションを数セットし残りの250M程を全力で走る、息が上がる、冷たい空気が肺に入り込む、息苦しくなる、それでも無視して走る、限界、その場にひざまずいた、何か違う生き物が喉から出てきそうになる、体が一気に熱くなる、上半身はシャツ一枚だけ残して全部脱いだ、身体をいじめているようなものだと思つていい残して全部脱いだ、身体をいじめているようなものだと思つていい、今の自分にとつてそれは心地よいことにさえ思えている。やり場のない怒り、それを今は自分にぶつけているのだろうか。帰りの500Mはゆっくりとながしながら走る、水道でタオルを洗い体をふく、冷たいタオルが心地いい、生きている、ふとそう思った。

いつもの一日を過ごす場所に戻つてくる、人間とは不思議なものだと思う、ここにいる理由は何もないのに戻つてくる、今の自分の居場所、心のどこかでそれがあると安心するのだろうか、戻つてくれる自分に満足するのだろうか、「生きている」とはそういうことなのだろうか、落ちている煙草に火をつけた、またぼんやりと煙を見つめた。

## 再会

人影、ここに居て半年程になるが自分の前で立ち止まつた人は1人しかいない。自分のことを不憫に思つたのかお金置いて行つてくれた人がいただけだ。顔を上げた、逆光の太陽がまぶしい、顔の輪郭が浮き上がっている、やがて顔が見えた、

「…直樹」声がもれた、直樹は微笑んでいるように見えた、

「 . . . さがしたぜ、一敏」

俺は立ち上がり直樹と同じ目線に立った。この半年間、人の顔をじつと見据えたことなどなかった、不思議な感情が湧きあがってくる。直樹と目が合う、哀しい色をたえた目だと思つた、半年前はこんな色の目はしていなかつた、半年の間に乗り越えた事がそうさせたのだろう、目を見れば分かつた。俺は声を出した。

「元気そうだな」何と言つていいかわからずなんとなく出た言葉だつた。直樹は笑つた、

「お前もな、少し痩せたようだけね」直樹はそう言つて俺をじつと見つめてきた。

「なんだつてこんな所にいるんだ、金はある程度持つてただろ? お前らしくないぜ」言つてまた俺を見つめてくる。

「何もかも投げてみたくなつたのさ、退屈だけビリにはっこでいゝ所さ、自分を見つめなおすには丁度良かつた、ただ同じ毎日を繰り返す、そんな生き方もいいのかもな」

「本心か?」

「さあな、今の俺にはこんな時間が大事だつたとは思つがな」言つて俺は微笑んだ。

「一敏、お前いい目をしてるぜ」

「何だよ急に」

直樹はしばらく俺を見つめて口を開いた。

「巻き返そーゼ」言つて直樹はじつと俺の目を見つめてくる。やはり哀しい色をたたえた目だ。

「復讐か?」

「真実を知りたいんだよ」

「知つてどうする」

「このままでいいのか?」言われて俺は心に血が流れたような気がした。ここに落ちてきたときから、いや、運び屋の仕事をしているときから心の中で何かが止まつたような気がしていた、それが今少し動き出したような気がした。「目標」、今迄の自分に欠けていた

ものが見つかったような気がした。俺は生きながら死んでいたのか、ただ死ぬために生きていたのか、心に血が流れはじめている、今はっきりとそれを感じている。

「恭一はもう動き出しているぜ」

懐かしい響きだった。

「もう、会ったのか」

「ああ、あの後すぐに恭一と合流したよ、恭一は裏から色々と探っている、細かいことは近時か連絡が入る、一敏ともすぐに合流したかったけど、何処にいるか分からなかつた、方々あたつてやつとそれらしい情報が入つた、それが昨日だつた」

「手間取らせたな」

「やるんだろう」

「ああ」

「明日午前1-1時、〇駅の東側迄来てくれ、まだ車はあるのか?」

「持つてるさ、ちゃんと貸ガレージに隠してあるよ」

「そうか、OKだ、じゃ、明日〇駅1-1時だぜ」言つて直樹は俺を見つめた。

「ああ、明日な」言つて俺は踵を返した。ここに戻ることはもうないだろう、約半年の間の俺の居場所。次の俺の居場所はどんな所だろうか? そう思いながら歩いて行く。もう後ろは振り向かなかつた。

始動

俺はそのままガレージに向かつた、ここに来る前にガレージを借りて車を隠した、ポケットからガレージの鍵を出してシャッターを開けた、黒いその車は俺の帰りを静かに待つていたように佇んでいた、俺の全てだといつてもいい車だ、ルーフポルシェR t 1 2、6 5 0 p s、フロントのトランクを開け、はずしておいたバッテリーの端子をつないだ、ついでにスーツケースも取り出しリヤシートに放り投げた。キーを出しスターターを回す、少し長めのクランキン

グでその獰猛なエンジンは静かに目覚めた、「待たせたな」そう車に話しかけ水温計の針が少し動いたところでギヤをローに入れた、そろそろと走り出す、そうやつてしばらく走り水温計の針がある程度まで上がりつてきてから普通に走り始める、もうオイルも回ってきてたどろう、アクセルを踏み込んでみる、瞬時にタコメーターの針が跳ね上がり強烈なGが体を襲う、流れる景色が瞬時に変わる。少し慣れが必要だなと思いながら、ラブホテルの駐車場に車をすべりこませた。

スーツケースを取り部屋に入り風呂をためた、スーツケースから取り出したナイフで髪を剃り髪を切った、ひよんなどいで知り合つた元フランス外人部隊の男がナイフで髪を切る方法を教えてくれたのだ、見よう見まねで何度もするうちにそれなりにつまく切れるようになつた、アマゾン河流域に住む部族がピラニアの歯で髪を切る習慣があるのを見たことがあるがそれよりは簡単なのかもしないとふと思つた。風呂につかる、温かい感覚が体を包んでくる、心までは温まらなかつた、この半年間、水で濡らしたタオルで体を拭いていた、そつちの方が俺には似合つてゐるような気がする、けど今は心に血が流れ始めている、事が進んで行けば心も温まるのだろうか。

風呂から上がりスースーとスープを取出す、コルトキングコブラステンレス6インチ357マグナム、「裏稼業」日本ではそんな言葉がピッタリの道具だ、シリンドラーをスイングアウトし弾を込める、シリンドラーを戻し構えてみる、外国で訓練をした、結構な腕にはなつていた、多分衰えてはいないだろう、身体が覚えている、国内では使つたことはないし人を撃つたこともない、なるべく使いたくはなかつた。

銃をスースーとスープに横たわつた、やわらかい感触が久しぶりだつた。半年前までは普通だつた感覺、別に快適だとも思わなかつた。慣れてしまえば人間どうにでもなる、半年間の生活で悟つたことだつた。

明日の待ち合わせの時間にはまだ時間がある、眠れるだろう、アラームをセットした、ベットに吸い込まれそうな錯覚が襲つてくる、やがて目を閉じた。

## 相棒

アラームが鳴り響いた。午前6時、俺はベッドから抜け出しシャワーを浴びた。ここからの駅までは普通に走つて4時間ぐらいだろう、車に体を慣らすには丁度いい。手早く荷物をまとめ、支払を済ませてホテルを出た。

町を抜け、高速に乗つた。平日の朝はこの時間でももうかなりの車が走つている。前の車について追い越し車線を120キロ程でゆつたりと走つて、やがて前走者が道をゆずつた。

走行車線には車が並んで走つているが、追い越し車線は道が開けていた、3速に落としアクセルを踏み込んだ。フラットシックの3.8レツインターが瞬時に反応する、景色の流れが一気に変わると同時に強烈な加速Gが体を襲つてくる、フラットシックスの咆哮が聞こえ、この車の本当の姿が現れる。タコメーターの針は4千、5千、6千と瞬く間に跳ね上がり4速にシフトアップ、車速はもう250キロを優に超えて、車体は路面に張り付いたように安定している、ステアリングを通してそれが伝わつてくる、5速、300キロ、車はなおも加速を続けたがるがアクセルを離しブレーキを踏んだ、ほんの10数秒の出来事だ、色々な高性能と呼ばれる車の謳い文句はあまり信じられたものでは無いが、このルーフRt12の性能は伊達ではないだろう、何よりも自分の全てを賭けてもいいと思える車だ、俺にとつては他はない。究極の相棒だ。車速を150キロくらいにしばらく走りパークリングエリアに車をすべりこませ、かるく朝食を食べた。午前8時だ、町を出て1時間くらいになる、空は晴れていた、昨日のこの時間は直樹と再会していたころだ、心

に血が流れ始め、この半年間の生活が一気に変わった朝を迎えたころだ。渋滞情報をチェックした、特に渋滞や事故はないようだ。この分で行けば約束の時間には楽に間に合うだろう、俺は車に戻りエンジンを掛けた。エグゾーストからは低いアイドリングの音が聞こえている、相変わらずバランスのいい滑らかな連続音だ、一つ一つの部品が完璧な仕事をしている。いつだって冷静なこいつに、少し嫉妬しそうになった。「行こうか」俺は車に話しかけ、ギヤをロードに入れアクセルを踏み込んだ。

## 追跡者

○市に着いた。インターを降り、途中、携帯電話ショップで携帯電話を買つた。連絡を取り合うのに必要になるだろう。覚えていた直樹と恭一の番号を登録した。待ち合わせまで時間がまだあつた、○駅の周辺を少し走つてみた。道をチェックする。運び屋の仕事をしていた時の習性で逃走に適した道や、隠れるのによさそうな場所が目に入つてくる、退路を確保するのは生き延びるために必要なことだつた、追いつめられる、イコール終わりを意味していた。

バックミラーを頻繁に見る、これも癖になっていた。一台気に入る車があった。○駅の前を通りすぎたあたりから、シルバーのベンツが一定の間隔を置いてついてきている。Eクラスのベンツは別に珍しくなかつたが、路地を通り抜けてみても、同じ場所を走つてもやはり一定の間隔を保つてついてくる。間違いなく俺をつけていた。腕は悪くなさそうだ。街中で一定の間隔でつけるのは意外に難しい、周りの状況判断と追跡目標の先を読む力がないとすぐに信号などに引っかかるたり、他の車に割り込まれて見失つてしまふからだ。俺は気付いていないフリをしながらぶらぶらと町を流し、少しずつ○駅から遠ざかつた。

国道に入る交差点で赤信号で止まつた。バックミラーを見る。 5

台後ろにそのベンツはいる。ワインカーを左に出した、信号が青になると同時にステアリングを左にきりアクセルを踏み込み車をテールスライドさせ一瞬で左に曲がった。そこからフル加速する。フラット6が咆哮をあげ、強烈な加速Gがかかる。前走者をスラロークしながら避け速度を上げる。150キロ、周りを走る車は80キロ程で走っているだろう、一瞬でも判断を誤れば即、終りになつてしまふ、綱渡りをしているようなものだ、心がカツと熱くなつた、久しぶりにこんな気持ちになつた、笑みがこぼれた、「生きている」そう実感できる瞬間だ。バックミラーを一瞬確認した、ベンツの姿はもうそこにはなかつた。300M程先の右コーナーが深く切り込んでいた。場所を頭にたきこんだ。今度は俺から仕掛ける番だ、車速をゆるめブレーキを一瞬踏み込みステアリングを右に切ると同時にサイドブレーキを引く。スピントーン、車は奇麗にテールスライドをして180度方向を変えた。アクセルを踏み込む、ホイルスピンドを伴いながら今走ってきた道を強烈な加速で戻つていく。シリバーのベンツEクラスがかなりのスピードでこっちに向かつてくるのが見えた。相対速度が速いため次の瞬間には相手の顔が見えるまでに接近していく。フルブレーキングからスピントーンへ持つていぐ、ドライバーの顔をとらえた、驚いたような顔をしているのがなんとなくわかつたが見た顔ではなかつた。アクセルを踏み込む、加速Gが体を襲つてくるが大分なじんできたようだつた、加速と車になじんできたのだろう完全にドライビングの勘は取り戻していった。今度はベンツが前を走つて、スピードを上げていつていて、ちらの加速が上だつた。エンブレムがみえる、AMG E55だつた。V8の5500ccの353psかなりの高性能車だ。「今回は相手が悪かつたな」俺は前を走るベンツに声をかけた。時より走つて走行車をスラロームをしながらバスをしていく、傍から見ていたら2台がランデブーしているように見えるだろう。やはり前走車のドライバーは腕はよさそだつた。まだリズムが崩れていない。俺は車間をつめて後ろヘッピタリと張り付いた。ベンツはアク

セルをさらに踏み込んで引き離そうと試みるが無駄なことだった。前走車のリズムが狂い始めた。速度は150キロを超えようとしている。頭に叩き込んだ場所にさしかかった。フルブレーキング。ベンツが猛烈に離れていく、後ろに気を取られていたのだろう、その先は深く切り込んだ右コーナーだ。ベンツのブレーキランプが点灯したが、間に合わなかつた。ベンツは激しくガドレールに叩きつけられてスピンしながら100M程先で止まつた。ベンツは白煙を噴いて無残な姿でうずくまつてゐる。俺は車を降りてベンツに駆け寄つた。2人乗つていた、事故の衝撃で気絶してゐるようだつた。俺はドアを開け手早く2人のポケットをさぐつた。財布が出てくる。俺はその財布をポケットに入れその場を立ち去つた。そろそろ後続の車や、対向車がくるだろう。あの2人が無事かどうかは知つたことではなかつた、そこで死んでしまえばそれまでの命だつたということだ。ただ、今はつきりしたことは俺たちに動きまわられると困る奴がいるということだ。それともう一つ、体が熱くなつてゐた。昨日少し動きだした心の中で止まつてゐたものが完全に今、動いてゐる。血が流れている。

そうだ、「生きている」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3130e/>

---

星

2011年1月9日14時24分発行